特集〈つくる〉

楽しく作る　汗して作る

古谷　久美

アイガモ農法の『米作り』

春、田植えも終わりに近付く頃、生まれたてのアイガモのヒナ達が我が家にやってきます。生後すぐに水に慣れていくことが、ヒナ達の最初の仕事。ヒナ達は約二週間の間、水浴びを繰り返しながら、水をはじく羽になり、体付きもしっかりとしてきます。

その間、田んぼの苗も少しずつ根を張り、葉を伸ばしていきます。そんな様子を見ながら、私達は、各田んぼの周りに網を張り（＝カモが外に出ないよう）、電気柵を張り（＝カモを狙う犬などが入れないよう）、田んぼの上には糸を張り（＝カモを狙うカラスが降りてこられないよう）、準備をします。

そしてヒナ達が田んぼにデビューします。ヒナ達は、広々とした新天地をのびのびと泳ぎ廻りながら、飛んでくる虫や泥の中の小さな生き物を食べ、雑草をつつきます（不思議なことに、アイガモは、稲はつつかないようです）。そのお陰で、アイガモのいる田んぼでは、農薬や除草剤を撒く必要はありません。そして、それだけではなく、アイガモが泳ぎ廻って稲の根元に刺激を与えることで、がっちりとした丈夫な稲になり、更にアイガモのフンは、最高の天然有機肥料となります。つまり、アイガモの田んぼでは、無農薬有機栽培のおいしいお米が収穫できるのです。

稲はぐんぐん大きくなり、アイガモ達もぐんぐん大きくなります。夏を迎える頃には、稲はアイガモ達の心地よい日除けとなってくれます。稲の茎の中から穂が芽生え始めると、アイガモ達を陸に上げます。アイガモは、稲の穂をつついてしまうからです。稲刈りが終わり、秋から冬へと寒さが増す中、アイガモ達は脂ののった肉質となり、食されることになります（生まれた時から毎日世話をしてきたアイガモ達、田んぼでスクラム組んで健気に働いてくれたアイガモ達に思いを馳せ、心から感謝しながら、その「生」をしみじみと頂きます）。

アイガモ農法のお米作りには、一般栽培の枠を超える柔軟性と広がりがあります。これまでお米しか作っていなかった田んぼが、アイガモ達の格好の生活の場となります。厄介者でしかなかった雑草や害虫がアイガモ達のエサになり、フンとなって、おいしいお米を作ってくれます。生き物を育てていく楽しさや大変さ、自然界の命の巡りの現実、そして、人間は他のたくさんの命を頂きながら自分の命をつないでいるという実感……折りに触れ、様々な発見や感動があります。楽しく、おいしく、奥の深いお米作り、それが私達にとってのアイガモ農法です。

有機農法と『土作り』

一粒の種モミが、内なる芽を出し、根を生やし、茎を伸ばし、葉を広げ、穂を育み、やがて百粒余りの穂を実らせていく……そんなドラマを支える陰の主役が『土』です。

有機農法では、この大切な役割の土をどのように作っていくかが重要なポイントです。土の中には様々な微生物が棲んでいます。微生物達は、タンパク質を主原料とした有機質を食べ、ミネラル等の微量要素を放出します。この微量要素が稲の根を元気にし、お米がおいしくなる栄養素を根に与えます。良質な有機質を入れてじっくりと土を作り、土中の微生物の働きを活発にしていく、これが有機農法の基本と言えます。

化学肥料や農薬に頼った農法は、一つ一つの事態に対応していくだけの対症療法になりがちです。有機農法では、ひたすら、稲の「生」の力を信じています。稲が本来もっている「生」の力をそのままに十分に引き出せるように環境を整え、健全な稲を作っていきます。病害や虫害、悪天候に見舞われても、有機農法の田んぼの稲は、他に比べてダメージが少なく、力強さとしなやかさが感じられます。

秋、刈り入れの終わった田んぼの土は、乾いた淡い匂いがします。冬の間、田んぼには堆肥や米ヌカ、骨粉、魚粉などの有機資材が丁寧に混ぜ込まれ、じっくりと熟成していきます。春めいた陽射しに霜が溶け始めると、土は黒々と光り、何とも言えないふくよかな匂いが立ちこめます。作物を育む大地の「いのち」に満ちた奥深い匂い、「土が生きてる！」と実感できる大好きな匂いです。

農家の暮らしと『作る』ということ

農家の暮らしをしていると、身の回りの何でもを道具や材料にして、必要な物を作り出していく手際の鮮やかさに、しばしば驚かされます。

例えば土は、作物を育む役割だけではありません。土を掘り起こしてビニールハウスの裾に乗せ、足でギュッギュッと踏み固めれば、強力な重しになります。土をビニール袋に入れ、それで田んぼの用水の出入口をふさいだり開けたりして、田んぼの水の量を見事に調整します。裏山の竹を切り火であぶって曲げればビニールハウスの押さえになります。田植え仕事の合間にセリをとって、それが夜のおかずの一品。小枝拾いをしながらとった山菜も、仕事の傍ら七輪でコトコト、これもおかずの仲間入りです。

お金を出せば便利で快適な生活もありますが、今身近にあるものをどのようにしていくと生活の役に立つかを考えて、効率よく手を動かしている姿が多く見受けられます。生活者としてのたくましさ、安定感に満ちた頼もしい姿です。

手を動かし、或いは体を動かして生活に必要な物を『作る』という行為は、現代の日常生活の中でどの位の割合を占めているのだろうかと、ふと思います。自分の体を使った実体験よりも頭の中で観念的に物事を操作したり、『作る』よりも『消費する』方に偏ったりしている姿が目につきます。そして、極端な場合には、『作る』よりも『壊す』方向へと走ってしまう……もやもやとしたやるせなさが小さな子ども達の中にも感じられます。

我が家には、「農業体験をしたい」と時々、お客様が訪ねていらっしゃいます。小学生から年配の方まで、皆さん体を動かし、汗をかき、「あー、疲れたー」と気持ち良く言うその顔は、柔らかく生き生きとしています。

体を動かして物に働きかける、その手応えを五官で鮮やかに感じ取る、その実感や発見の感動が心地よい充足感となって体中に広がり、活力となっていく……。現代社会を生きる私達にとって『作る』という行為は、計り知れない力を与えてくれるのでは

ないでしょうか。そんなヒントの一つが、農家の暮らしの中にあるように思われます。

（千葉・セイダイ農場）

小児病棟と中学校での『空間』づくりから

倉田　知子

親や先生など直接的な存在以外に、ほどよい距離で自分を大切に見守ってくれる大人の存在、その大切さに注目して取り組まれている二つの『空間』づくりについて考えていきたいと思います。

小児病棟での『空間』づくり

ある小児病棟のプレイルームに、大きな紙袋を提げた、先生でも看護婦さんでもお母さんでもないエ